

五味川純平

ご み かわ じゆん ぺい

1916年 満洲に生まれる
東京外語英文科卒
満洲にて就職。応召

1948年 引揚げ

著 書 『人間の條件』『自由との契約』
『孤独の賭け』『歴史の実験』
『アスファルト・ジャングル』
いずれも三一新書

現住所 東京都渋谷区神宮前 1-15-3

戦争と人間 3

定価 260 円

1965 年 7 月 30 日 第1版発行

1965 年 8 月 5 日 第18刷発行

著 者 © 五味川純平
1965 年

発行者 竹村 一

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話 東京 (291) 3131~5 番

振替 東京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 490

戦 争 と 人 間

3

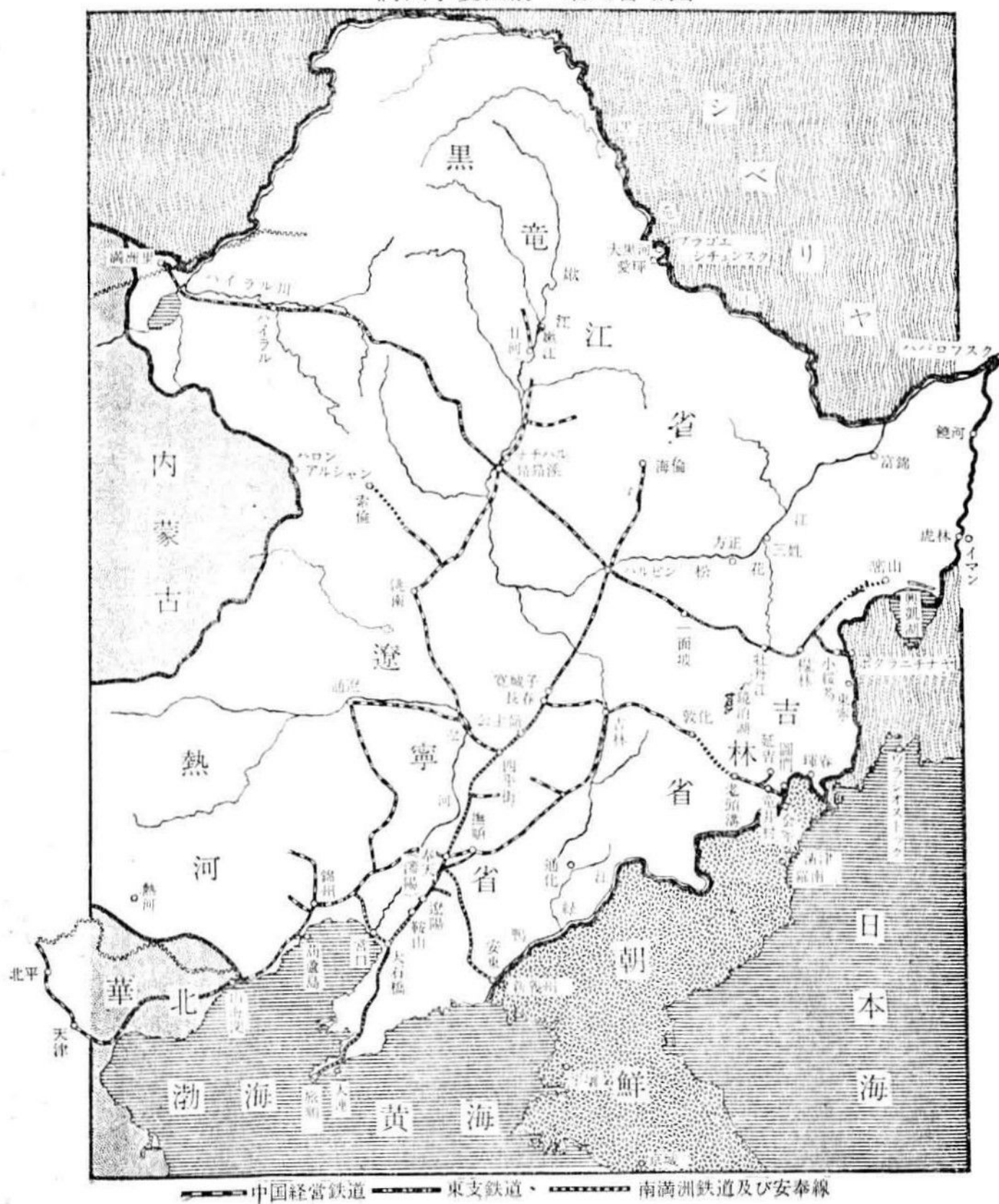
運 命 の 序 曲

第 三 部

五味川純平 著

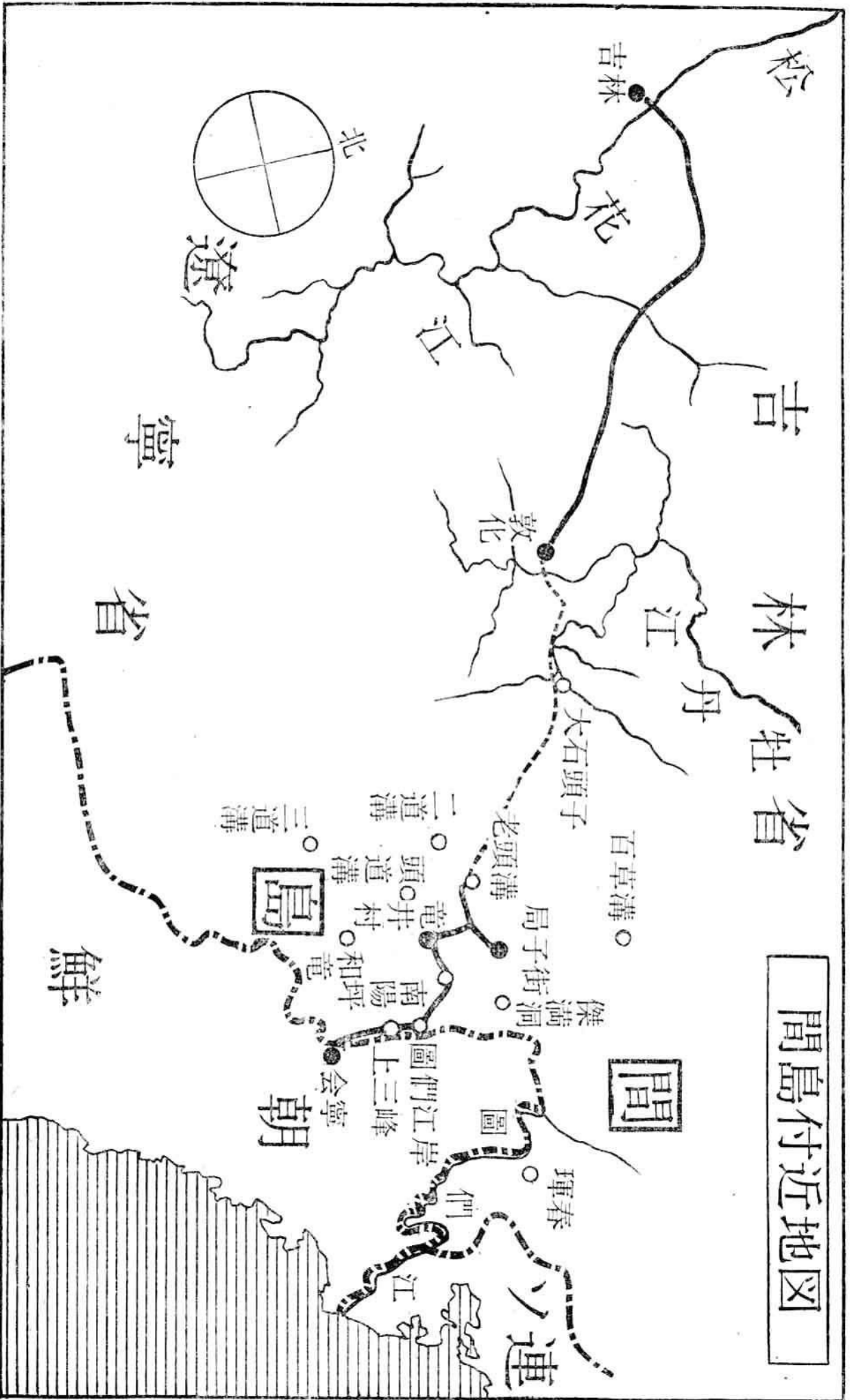
三 一 書 房

満洲事変直前の東三省略図



戦争と人間

間島附近地図



運命の序曲

第三部

申しわけのように疎らに立っている並木が、みすばらしい春を迎えていた。せつかくの新緑が埃まみれである。並木とは反対に、家並はびっしりと建てこんで、ひしめき合って道路へはみ出していた。

その通りを、女が、ちびた跛の下駄をつっかけて、垢だらけの足を曳きずりながら歩いていた。汚れるだけ汚れた髪をしきりに搔いては、口走っている。帯がだらしなく垂れ下っているのも、裾前が乱れて割れているさまも尋常ではない。確かに狂っている。

「お腹がすいたか……お腹がすいたか……」

干割れた声で、あやすようにひとりごとを云うのである。

町の人びとは見慣れているらしい。気にもとめなかった。子供たちも、その界限では、気違いのまわりに群がって囃し立てたりはしなかった。

耕平と並んで歩いていた俊介は、足がひとりでに止った。

「……あの人は、どうしたんだ？」

「ほっとけよ」

耕平が小声で云った。

女は、店先きで、毒々しいほど赤いジャムを塗ったパンをみつけると、急に眼をギラギラさせた。

「ああ、どっさりある！」

女は愉しそうに手を打った。

「子供を連れて来なくちゃ、食いきれやしない！」

「行った、行った」

店のおやじは野良犬を追い払うように、女を追い立てた。

「さあ行くんだ。さもないと、おまわりが来るぞ。行った、行った！」

女の方はしつこくねだるでもない。搔っ払って逃げる悪知恵も働かないらしい。おまわりの怖ろしさだけは、かろうじて弁えているようである。あとずさりして、ふらふらと歩きだしてから、今度は俊介に眼をとめた。

「かわいい坊や」

女が云った。

「かわいいそうに。お腹がすいたんだろ」

俊介は瞬きもできなかった。まだ覚えのない圧迫感に、体の自由を失いかけていた。これに似た感じをしいてあげれば、剣道の教士の竹刀が間合を詰めて来るときのようにであった。女の方は、干からびた手を伸して、俊介のなめらかな頬に触れようとしたにすぎない。

俊介は跳びのいた。その動作が女の気持に衝撃を与えたにちがいないのである。女は、やさしく触れようとして虚しく泳いだ手を、急に握り締めて、痙攣をおこしたように拳を震わせた。いまにも恐ろしい叫び声をあげそうに見えた。

「おめえさんたち、かまわん方がいい」

ジャムパンを売っている店のおやじが二人の少年に云った。

「知らん顔して行きな。相手は桃に鶯だ」

「木（気）がちがう」というおやじの洒落は、俊介にも耕平にもわからなかったが、その場には確かにいない方がよさそうであつた。耕平の方から促がして、二人は離れて行った。

ふり返ると、女は、着物が風に吹き流されているようにして、埃っぽい通りを歩いていた。

「……あの人は、子供に飯を食わせられなくて、気が狂つたんだ」

耕平が説明した。

「ああやって、よくこの辺を歩いてるんだよ」

「……飯を食わせられないって、どうして？」

「おやじが失業してるんだ」

「……日雇人夫の仕事ぐらい、あるだろう？」

「あれば文句はないよ。……土方殺すにゃ刃物は要らんというの、知らないか？」

俊介は答えなかった。

「ずっと前に兄貴が教えてくれたんだ」

耕平が云った。

「土方殺すにゃ刃物は要らぬ、雨の十日も降ればよいって。雨降りでなくなつて、いまは仕事がないんだよ。失業者が何万人もいるんだ。失業者の家ではね、軍隊や百貨店やビルの残飯を買って来て食うんだ。百匁二銭な

んだよ。それさえ買えない人がいるんだから……」

「あの人の子供は、しょっちゅう、お腹がすいて泣いてるの？」

「そうだと思うよ」

「……悪かったな」

間をおいて、俊介が呟いた。

「なにが？」

「俺、気味が悪くて、逃げちゃったんだ」

「悪くはないさ。……悪いのは、貧乏だよ」

俊介は耕平の横顔を見た。その横顔は、俊介には、自分よりずっとしっかりしていて、おとなっぽく見えた。

「……君も……」

俊介が口ごもって、やつと思いきってきいた。

「君も残飯を買って食ったりすること、あるのかい？」

「……そんなこと、どうだっていいじゃないか。僕はこのとおり元気さ」

「……よくはないよ」

俊介は途方もなく暗い淵へひきこまれたような気がした。

「この辺の小学校ではね、昼飯を食えない生徒がたくさんいるんだ。二丁場ばかり先きへ行くと、貧乏じゃない人の家が並んでるんだけど、変なもんだね、道路が三筋か四筋でてんでちがうんだから……」

俊介は黙々と聞いていた。

「……この辺の小学校では、昼の弁当のない生徒に、学校で食べさせてやってるんだ。だからね、小さな子供は、学校は昼飯を食いに行くところと思ってるんだって。しかし、昼だけ食えないのは、まだいい方なんだよ。学校で食わしてもらう昼飯だけで、一日じゅう我慢してる子供もいるんだよ」

「……君、知ってるの、そんな子……」

「ああ」

耕平がうなずいた。

「俺んとこの近くに、五年生の女の子がいる。お母さんだけでね、弟や妹がいっぱいいるんだ。この女の子は、毎日、縁起ダルマを行商して歩いて、二十銭か三十銭稼いでるんだけどね、昼になると、必ず学校に行く。弁当をもらいにさ。半分食って、半分は残すんだよ。昼休みが終わったら、直ぐに帰ってまた行商だ。雨の日だけ、学校に行って勉強するんだ。雨だと、ダルマが濡れて駄目になるからね……」

「……じゃ、春休みで、いまは弁当を食いにも行けないわけだね……」

「……その子だけじゃないさ」

俊介は口をつぐんだ。「食えない」とか「飯の食い上げ」とかいうことは知っている。どんなものかは知らないのだ。想像さえもつかない。自分より齡下の子供が一日に一度しか食えずにいる。そんな子供にせがまれて、どうしてやることもできない母親が発狂する。そういう事実が現にここにある。俊介は、灰山の絵にある暗い世界を心のなかにひろげてみて、不自由のない豊かな生活に浸っている自分に罪があるような気がした。

「……今日は日曜だろ」

俊介が突然云った。